

佳作

命の価値

広島県 広島市立祇園東中学校一年 加藤 晶

私は、価値のない命なんてないと思います。

先日、母がスーパーマーケットで買った小松菜に小さな青虫がついていました。外に逃がそうと母は青虫を持ってベランダに向かいました。私はとっさに、

「待って！」

と言いました。理由は「その青虫がどんな色でどんな大きさの蝶に育つのか気になった」。それだけでした。名前は小松菜奈と呼ぶことにしました。育て方を調べ、プラスチックの家を用意しました。えさの小松菜を小さな口で必死に食べている菜奈を見て、私は虫が苦手だったはずなのに、かわいいと思いました。初めは、自分の食べる物に虫がついていたなんていやだなと思っていたけれど、小さな体を精いっぱい動かしてきれいな蝶になろうとしている菜奈を見て、応えんする気持ちへと変化していききました。

モンシロチョウになったのだと感動しました。菜奈に出会う前は、何とも思わなかったであろうモンシロチョウがきれいと思えたのは菜奈のお陰です。

この作文を書いている今日、菜奈はまだ蛹のままです。まだ蛹だけれど感じたことが一つあります。それは、価値のない命なんてないということです。生き物には当たり前だけれど命があり、その生き物を大事にし大切にしたいと思えば自分のその生き物に対する価値が生まれます。人に対しても同じです。その人の価値である良さを見出すことができます。きっと自分の価値も見つけられます。見方次第で価値を生み出せるのです。

菜奈が立派なモンシロチョウになることを願います。

翌朝起きて一番に菜奈を確認すると、かべにピタッとくっついて動かなくなっていました。「死んでしまったのではないか」。そう思った途端、悲しみと後悔でいっぱいになりました。昨日まで元気に食べて動いていた菜奈が全く動かないこと、あのまま外に逃がしてあげればこうはならなかったのではないかとという考えが浮かんだことも相まってじっと動かない菜奈をただただ見ることしかできませんでした。すると、もぞ、もぞとまた菜奈が動き出したのです。調べてみると、動かなくなっていたのは、前蛹と違って、蛹になる準備をしている状態だったのです。生きてくれていてよかった、蝶になるための階段を一步進んでくれていたのだと、うれしくなりました。

そして二日後、菜奈は黄緑色の蛹になりました。幼虫の時がうそだったのかと思うほどじっと動かないので時々心配になります。優しく見守ることしかできないのでそっとしておきました。

そしてさらに四日後、蛹は茶色へと変色しました。あと少しで蛹から孵る合図です。

ある日、散歩をしていると、きれいな羽のモンシロチョウが飛んでいました。このモンシロチョウも、元は小さく弱い青虫で大変な過程を経て、美しい